

「試験」からみた比較歴史社会学の方法

——マックス・ウェーバーを中心に——

帝京大学 大川清丈

1 目的

この報告の目的は、マクロな社会変動をあつかう比較歴史社会学の方法を、「試験」というパースペクティブから検討することにある。

2 方法

そこで、マックス・ウェーバーの比較歴史社会的分析が、「試験」についてどのように論じているかを検証する。また、ウェーバー自身が、当時のドイツにおいてどのような試験を受験してきたかについても、そのライフ・ヒストリーを辿りながら、比較歴史社会学と重ね合わせる。

3 結果

分析の結果、教育制度の基礎に関する〈専門人タイプ／文化人タイプ〉、およびこれらのタイプを選抜するための〈専門試験／教養試験〉という二分法が見られることが判明した。中国における科挙は、教養試験として家産官僚制を支えていた。また、近代官僚制、特にドイツの官僚制において、専門試験制度による選抜が行われるようになった歴史的趨勢が言及されている。

また、ウェーバーは、民主制が専門試験に対して「分裂的な態度」をとる、すなわち民主制は専門試験によってあらゆる幅広い社会層から人材を選抜すると同時に、試験によって「特権的なカースト」が成立することをおそれていることを主張している。

4 結論

以上から、比較歴史社会学的研究は、自国（ドイツ）の専門試験と外国（中国）の教養試験を空間的に〈比較〉すると同時に、時系列的に分析する＝〈歴史〉的視点、という二重の方法を基本に据えていることが判明した。

また、天野郁夫（1983）は、直接ウェーバー社会学に立脚したものではないものの、試験というパースペクティブから近代日本を対象にした歴史社会学的研究であり、今後の比較歴史社会学の方法を構築していくうえで、ひとつの準拠点になり得る。

〈試験と選抜〉という枠組みは、比較歴史社会学的研究において、きわめて有効であることが示唆されている。

文献

天野郁夫, 1983, 『試験の社会史——近代日本の試験・教育・社会』東京大学出版会。（＝2007, 増補版, 平凡社ライブラリー.）

尾中文哉, 1989, 「試験の比較社会学——儀礼としての試験——」『思想』778, 96-111.

Weber, Max, 1920-21, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 3 Bde, J.C.B.Mohr. （＝1972, 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房 ほか）

Weber, Max, 1936, *Jugendbriefe*, J.C.B.Mohr. （＝1973, マリアンヌ・ウェーバー編, 阿閉吉男・佐藤自郎訳『マックス・ウェーバー 青年時代の手紙』上・下, 勁草書房.）

Weber, Max, 1956, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 4.Auflage, J.C.B.Mohr. （＝1960, 世良晃志郎訳『支配の社会学』I, 創文社 ほか.）